

第 1 章 洞爺湖周辺の歴史

石谷 浩之

1.1 洞爺カルデラの形成から現在までの概要

洞爺カルデラは約 10 万年前の最終間氷期に数回の噴火を経て形成され、最後の大規模な噴火による降下火山灰は北海道から東北にかけての広い範囲の地層に見られる。カルデラ壁周辺には火砕流堆積物による台地も形成されているため、戦前より昭和 30 年代(1955～64 年)まで操業した幌別硫黄鉱山からそのまま垂れ流しにされた鉱山廃水により、昭和 30 年代には湖水が pH2 ほどの強酸性に汚染され、多くの生物が死滅した。ところが、1977 年に有珠山が大噴火、大量の火山灰が洞爺湖へ降り注ぐとアルカリ性の火山灰によって酸性の湖水が中和され、結果として酸性が緩和される形となった。元々は貧栄養湖で透明度は高かったが、閉山した鉱山廃水のほかにも南岸の洞爺湖温泉街を始めとして排水の流入が増えていたため、現在は透明度の低下が著しい状況である。

1.2 洞爺湖と有珠山の噴火の歴史

洞爺湖をつくった洞爺火砕流の噴火は、海洋同位体ステージ 5.4、すなわち 10 万 5000 年前に起こった。北日本各地の顕著な海成段丘を覆う洞爺火山灰の層位から決められたこの年代は、±1 万年以内の精度で確からしい。伊達市中心街や洞爺村高台地区は、この洞爺火砕流堆積物がつくった台地の上にのっている。この噴火以降、1, 2 を争う規模の噴火は 1663 年に起こるのであるが、この年以降の有珠山噴火については次頁の表にまとめた。

「洞爺」という地名の由来はアイヌ語の「トヤ」（湖水に面する肥沃な岡）からきており、「有珠」の由来もまたアイヌ語である。有珠山は「ウス」（入り江）からきているとされるが、アイヌの人々は有珠山を「アシリヌプリ」（新しい山）と呼び、「軽石を削り出す神」と呼んで恐れていたとされる。また、アイヌの人々の間では、「鰵（カジカ）」の口碑伝説が更科（1963）に記録されて伝わっており、以下はその内容である。

「鰵ってやつは海や川ばかりでなく、どこにもいるもんだ。土の底にもいるし、夜の天にある天の川にも棲んでいる。あいつはなんでも食うんだ。川の石まで呑むことがあるが、魚なら何でもかんでも、おかまいなしに呑んでしまう。天の川にいる奴は毎日鳥ばかり食っているんだ、餌の鳥がなくなると野郎おこってあばれるんだ、そうすると大地震になる。土の中の大鰵はフシリコロエッケウチェブ（島を支配する腰骨魚）といって、こいつも動くとき大地震になる。だから地震がおきたら、火箸を^{いろり}爐の中にさして「こら！あんまりあかれると腰に刺さるぞ」というんだ。（胆振虻田、遠島タネランケ姥伝）」

この地域の被害地震として、2000年有珠山噴火に伴う地震（M4.3）や1910年有珠山周辺の地震（M5.1）などがあり、火山性の群発地震が頻繁に発生している。よって、この地域のアイヌの人々は、地震の原因をカジカに例えて伝えたと考えられる。

表 1.1 有珠山噴火の歴史

1663(寛文 3)年 7 月	噴火。小有珠生成 付近の家屋が焼失、または埋没。死者 5 人。
1769(明和 5)年 12 月	噴火。火砕流発生。民家焼失。
1822(文政 5)年 3 月	地震増加から 4 日目で噴火。その後火砕流が発生、1 集落が全滅。死者・行方不明者 103 人。
1853(嘉永 6)年 4 月	地震が激しくなってから 10 日後に噴火。数ヶ月間、噴火が続き、この間に火砕流も発生。大有珠の溶岩円頂丘が生成された。
1910(明治 43)年 7 月	19 日から地震が始まり、25 日に爆発。約 45 ヶ所の爆裂火口から土砂、岩などが噴出され、泥流も発生。家屋、山林、耕地に被害があり、泥流による死者 1 名
1944(昭和 19)年	前年 12 月下旬より地震が始まり、6 月 23 日噴火。7 月上旬にも大量の噴石、火山灰を噴出し 10 月末までに数回の白髪を繰り返す。翌 45 年になっても土地が隆起し続け、後に「昭和新山」と名付けられたりした。死者 1 名。
1977(昭和 52)年 8 月	6 日に有感群発地震が始まり、翌 7 日に軽石噴火。14 日までに 4 回の大きな噴火を含め十数回にわたり噴火を繰り返した。
2000(平成 12)年 3 月	31 日、西山山麓より噴火し、翌日は金比羅山より噴火し、全町民の清水・花和地区を除く 97%が町外へ避難した。

出典：2008 北海道洞爺湖サミット HP

1.3 洞爺湖町の歴史

1.3.1 洞爺湖町の成り立ち

洞爺湖町は、2006 年に虻田町と洞爺村の合併によって誕生し今に至っている。洞爺湖周辺には洞爺湖町と壮瞥町があり、洞爺湖に接してはいないが伊達市も挙げられるが、ここでは洞爺湖町の歴史に注目することにする。次の年表は、旧洞爺村と旧虻田町が誕生してから現在までの歴史である。

表 1.2 洞爺湖町の沿革

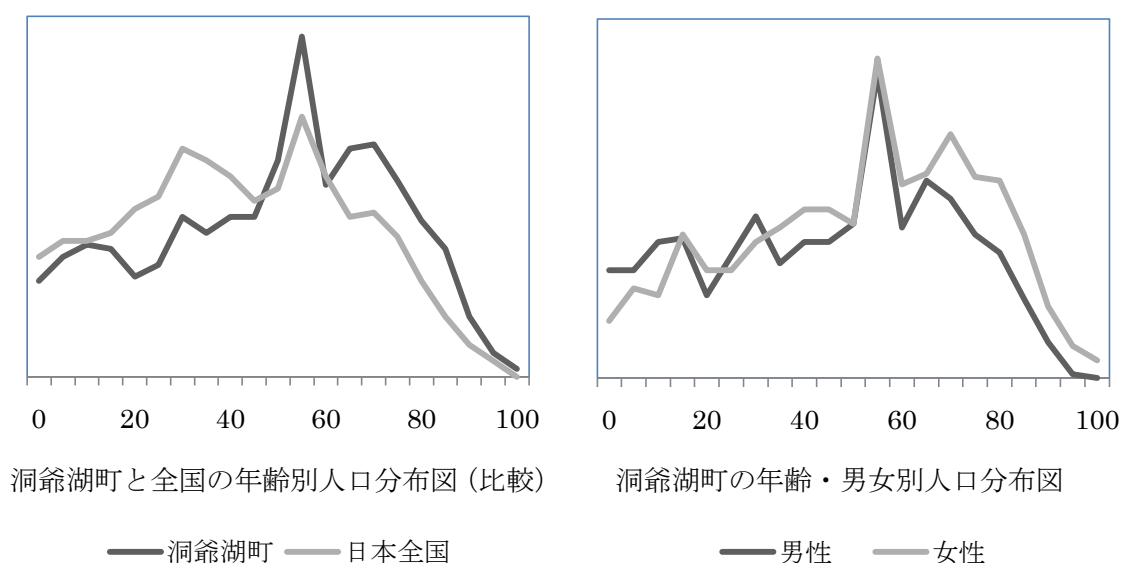
【旧虻田町】	【旧洞爺村】
1880 年 虻田町に虻田郡各村戸長役場を設置。虻田村・ふるなな振苗村・べべ弁辺村・れぶん礼文村を管轄。 1882 年 振苗村を併合。 1893 年 倶知安村（現在の倶知安町、京極町）を分村。 1897 年 まっかり真狩村（現在の真狩村、留寿都村、ニセコ町、喜茂別町）を分村。 1909 年 弁辺村（現在の豊浦町）を分離して虻田村役場を設置。 1938 年 4 月 1 日 一級町村制施行。 1938 年 10 月 1 日 町制施行し虻田町となる。	1887 年 香川県より 76 名が大原地区に入植したのを開基とする。 1895 年 数十戸の小作人が成香の 600 ヘクタールに入り、開拓に着手。現在の洞爺村の基礎ができる。 1902 年 虻田村・弁辺村組合役場設置。二級町村制施行。 1920 年 5 月 5 日 虻田村から分かれて洞爺村が誕生する。 1938 年 優良自治団体として、内務大臣表彰を受ける。 1947 年 村議会議員選挙が行われ、初代公選村長が誕生する。
【洞爺湖町】	
2006 年 3 月 27 日 虻田町と洞爺湖町の新設合併により成立 もともと両町村は同一の村（虻田町。旧虻田町に相当）であったが、1920 年に虻田町から洞爺村が分村された。86 年ぶりに 1 つに戻ったことになる。 2007 年 4 月 23 日 政府は、2008 年の主要国首脳会議の開催地を洞爺湖町に決定。	

出典：2008 北海道洞爺湖サミット HP

1.3.2 洞爺湖町の人口について

続いて洞爺湖町の人口の推移に着目すると、国勢調査で1980年には14,401人いたのが、2005年には11,343人と減少し、年齢別の人口分布では、高齢者人口が全国平均より高く、逆に20代から50代の人口は全国平均を下回っている。また、男女別の人口分布をみると、20代より上の世代はほとんど女性が男性の人口を上回っており、男性が地元に残らないという様子が窺え、その様子は第2次ベビーブームの時代に全国平均を大きく下回っていることから窺える。以下の図では、国勢調査による洞爺湖町の人口について詳しく載っている。

図 1.1 2005 年の国勢調査による洞爺湖町の人口



出典：ウィキペディア HP（洞爺湖町）を参考に作成

1.3.3 洞爺湖周辺を産業から見た歴史

胆振農業の開拓は、北海道史によると、「寛政10年(西暦1798年)、最上徳内が蝦夷地出張の際、信州長野から3個の種芋を持参し、虻田付近に馬鈴薯の耕作をさせ、また、文政2年(1819年)には、虻田、有珠地方に徳川幕府直領の馬牧を開く」などと記されているが、実際、開拓が計画的に行われたのは、1869年7月に函館に開拓使が置かれ、「蝦夷」から「北海道」に改称されてからのことである。当時、仙台藩伊達家の要望によって大政官より「胆振国内有珠郡石一郡其方支配ニ被仰付候事」というお墨付きがあり、1870年3月に本道における団体移住の先陣として伊達邦成が220余人の家臣を引き連れ、現在の伊達市に^{くわ}鉏を入れたことに始まり、今日の発展の基礎となった。

胆振農業の歴史で特筆すべきことは、府県と異なる自然条件下に府県農業をそのまま行

うことは避け、先進諸国の知識・技術を導入し、開拓当初からその普及に努めたことにある。即ち、1872年には官費による学校を設置し、人材を育成するとともに、1874年には西洋農機具（ようすき洋犁）の払い下げを得て耕作に使用し、引き続き1875年には果樹4,890本及び杉、ひのきなえ檜苗の栽培や牝牛40頭の導入等が行われるなど、寒冷地農業にふさわしい経営が考究された。更に、1880年には官営のてん菜製糖工場（現在の北海道糖業株式会社道南製糖所〔伊達市〕）が設置され、てん菜糖工場の先駆となったほか、亜麻製綿工場等も設置された。胆振農業は、このような経過をたどり、伊達市を中心とした西部地域から東部地域へと開拓が進められ、今日に至っている。

現在、洞爺湖は観光関連産業が盛んであるが、観光が北海道で盛んになるのは1972年の札幌オリンピック以降である。この時、北海道開発庁を中心に空港や鉄道の整備が進み、観光産業が大きく花開いた。しかし、洞爺湖への観光客は有珠山の噴火によって大きく減少するというリスクを孕んでおり、2000年の有珠山の噴火では、洞爺湖温泉街への被害を生み出し、観光客が減少している。

1.4 まとめ

洞爺湖は2008年のサミット誘致もあって名前が知られるようになったが、洞爺湖町における過疎化は、社会経済を考慮すると今後も避けられないと予測する。また、有珠山は活火山であり、今後も噴火が起こることを考えてみると、洞爺湖周辺に移り住むことはリスクと捉える人も少なくない考える。

洞爺湖周辺に住む人々は、火山と共に生活することを考えねばならないが、歴史的に有珠山が何度も噴火していることから、その歴史の中で過去の人々が、火山とどう付き合っていたのかを振り返ることは、1つの生きる知恵になると考える。

参考 HP

洞爺湖－洞爺湖町 HP

<http://www.dotown.jp/contents/spot/07/touyako/index.html>

洞爺湖と有珠山の噴火の歴史 HP

<http://www.edu.gunma-u.ac.jp/~hayakawa/news/2000/usu/fact/rekisi.html>

2008 北海道洞爺湖サミット HP

<http://g8-summit.town.toyako.hokkaido.jp/whatstouyako/history/index.html>

ウィキペディア HP（洞爺湖町）（参考にしたグラフは国勢調査のデータ）

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B4%9E%E7%88%BA%E6%B9%96%E7%94%BA>

北海道における地震に関するアイヌの口碑伝説と歴史記録 HP（PDF ファイル）

http://sakuya.ed.shizuoka.ac.jp/rzisin/kaishi_21/P121-136.pdf#search='アイヌ 歴史記録'

北海道胆振支庁 HP PDF ファイル「胆振の農業 2008」

<http://www.iburi.pref.hokkaido.lg.jp/>

MONTHLY-RENTAL-NETWORK ミスタービジネス HP

<http://www.mrb.co.jp/hokkaido/>

有珠山噴火災害と住民参加運動 HP PDF ファイル

<http://www.siu.ac.jp/daigakuin/kanko/usu.pdf#search='有珠山噴火 観光客 減少'>